転生少女の霧隠し

星月　悠

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気まぐれ更新になると思います

いつか消えるかも

目次

幼少期〜原作前
1話 1
2話 11
3話 22

幼少期～原作前

1話

気が付いたら転生していました

正直言うと俺も何が何だか分からないが、目を開けると知らない天井が視界いっぱいに映っていた

身体を起こすと明らかに子供の身体が視界に入る。思わず手とか動かしたり自分の顔をぺたぺたと触ったりする。首を横に向けるとちょうど鏡があり、そこにはキリッとした目つきながらもあどけない幼女がこちらを見ていた

鏡に近づくと、鏡に映った幼女も近づくように大きくなる

……なんで俺幼女になってるの!?

とりあえず俺の前世（？）を紹介しよう

俺は普通の会社員であり、主にコンピューター関連の仕事が回ってきていた

趣味はパルクールでインドアとアウトドアどっちつかずの生活をしており、大きなプ

ロジェクトも終わってやれやれと思いながらベッドに入って寝た……はずだった
あれれ～おかしいぞ～？……俺過労死する程働いた記憶無いんだけどな。会社も至ってホワイト企業だったし幼女になる要因もない
あ、俺が死んだと思ったのはね、
「蒼空ちゃ～んどうした～？」
「蒼空、どうしたの？」
両親と思わしき二人が俺を呼んでいるからだ。女性は生まれて数ヶ月の赤ちゃんを抱いていた
「ううん、なんでもない」
無反応では不審がられるから全力の笑顔を向けて答えた。俺前はフツメンだったからな～。ここまで顔が綺麗だと将来モテるんだろうなとほぼ他人事のように考えてると、父親の方が近づいてきて俺を抱き上げた。イケメンだなオイ
「ごめんね～、ずっと凛ばっかり構ってたから寂しかったんだよね」
そういう訳じゃないんだけどな。まぁ身体は幼女だし多少甘えないと可笑しいよな。中身三十手前の男だけど
父親の肩におでこをくっつけてグリグリとすると、さらに包み込む様に抱き締めてくる

身体は父親って事が分かってるからか安心感がある
俺はその微睡みに逆らうこと無く目を瞑った

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

俺はどうやら今アメリカに住んでいるようです。国籍は日本だけどね！
今日は父の元仕事相手に会いに行くようだ
俺は今四歳のようでまだ親に色々世話してもらわないといけない年だ。スカート嫌だな～と思っていたら、置いていたのはショートパンツ。記憶無い時もスカートは嫌いだったようだ。俺的にはラッキー☆
懐かしのチャイルドシートに乗せられて走ること数十分、一軒家に到着した
……ん？何かこの家見覚えがあるような。幼女の記憶に関わらずだけど
父に手を引かれ、玄関前でチャイムを鳴らそうとすると庭のところから何かを打つ音がした
父の顔を見ると、苦笑いを浮かべてそちらを見ていた
その後すぐ、黄色いボールがてんてんとこちらに転がってきた。父の手から離れそのボールを拾うと重さのない軽やかな足音が聞こえてきた

「……だれ？」
　そこにいたのはぶかぶかの白い帽子を被った〝テニスの王子様〟の主人公である越前リョーマとその兄リョーガが幼い姿でそこにいた
　……まさかの転生トリップでしたか　ありがとうございませんでした

「よぉ！二人目出来たんか！」
「まあね。というか相変わらずだね」
「い、いいじゃねーか別に！リョーマだって楽しんでるし」
「あら～可愛いわね～」
「赤ちゃんはみんな可愛いわよ～」
　父達は軽口を叩きあいながらも楽しそうに談笑しており、母達も凛ちゃんを中心に話してる。俺達子供は完全に置いていかれている
　さて、どうしよう。二人とはとは初対面……になるんだよな　多分
「よっ、俺とは初めましてだよな
　俺は越前リョーガ。よろしくな」
「……えちぜんリョーマ」
「……あさぎりそら。よろしく」

ちっちゃい子の挨拶の仕方とか知らん。取り敢えず笑っておけば困らないのは学習済みである。リョーガがこっちをじっと見つめてくるので、こちらも見つめ返すと突然ニヤリと笑った

わけがわからず眉を寄せると手を握られて引っ張られた。突然だったがバランスを崩すことなく走る事が出来たので内心安心しつつもリョーガの背中を見る

後ろからはリョーマの足音らしき音もするのでついてきている様だ

すぐに庭のような所に出た。そこはテニスコートの縮小版のような場所だった

大人しくついて行くとリョーガがテニスラケットを持ってきた

「テニスやろうぜ!」

「え、でもおれやったことない……」

「大丈夫だって!」

絶対大丈夫じゃない。知識しかない上に俺まだこの身体上手く使えねえってのに

急かされるままリョーガとコートを挟んで立つ。リョーガの持ち方を見様見真似で握ってみるが、この身体にはやっぱり大きいラケットだ。リョーマ程アンバランス感はないが正直どっこいどっこいだろう

地面から踵を離したり付けたりを繰り返したりと身体をほぐしてると父達が後ろから来たのが見えた

思わず振り向くと両親が驚いた顔でこちらを見ていた。まぁ娘が突然こっちを向いたら驚くよな普通

……これって鷲の目(イーグルアイ)とか鷹の目(ホークアイ)の類の目だよね多分

目を瞑って深呼吸してから目を開けると後ろが見える事はなくなった

「いくぜ！」

「！」

リョーガがサーブを打ったのを見てから走るとグンと予想以上のスピードが出た

突然の出来事に驚くがバランスを取って立ち止まる。サーブはもちろん俺の目の前を過ぎていった

ボールを追いかけて拾い、リョーガの方を見ると目を見開いてこちらを見ていた

え、なんでそんなこっち見てんのさ。そんなに見ても何も出ないよ

首を傾げながらボールをリョーガに投げて渡す。あんまり飛ばなかった

もう一度構えるとリョーガがニヤリと笑った

何かやる気だ。というか嫌な予感しかしないんだけど

パンッ

リョーガがさっきよりスピードのあるサーブを打った。さっきと同じように踏み出すと比較的簡単にボールに届いたのでラケットを両手で振り抜いた

ややラケットが上向きだったのかロブになってしまった。それはリョーガのチャンスボールとなりスマッシュを打たれた
でも、ボールを打った感覚は何か新しいものを見つけた時のワクワク感を感じさせた
自然と口角があがっていく
リョーガも笑ってサーブを打つ。それに追い付いて打つのが精一杯でコントロールもへったくれもないが、ラリーが少しでも続くと嬉しくなる
……楽しい！
まだ終わってほしくない　まだテニスをやっていたい
俺達だけで楽しんでいたからかリョーマが「おれもやる！」とコートに入ってきた
俺はリョーマに手招きしてこちらのコートに入るように促した
リョーガは依然として余裕のある笑みを浮かべるので、リョーマの耳に口を近づけてひそひそ話をした
「おれががんばって返すからリョーマがボレーして」
「ぼれー？」
「ネットきわで叩くボールだよ。ちからいっぱい打てば点数取れるから」
頑張ろ？というと素直に頷いてくれた。原作でのあのツンツンは何時からなんだろうか

可愛いな～同い年だけど息子見てる気分だぜ。俺より小柄だから余計に
リョーガのサーブの打つ面に立ちリョーガと向かい合う
パンッ！
リョーガのサーブを見て何処に打てばいいのかを頭をフル回転させて考え抜いたコースへと狙いを定めて打った
「はあっ！」
狙った場所よりずれたがリョーガを驚かせるには十分だったようで、ネット前のボールを打ってきた。もちろんそこにはリョーマがいて――――
「てやっ！」
リョーマがリョーガのボールをコートに叩き入れた。リョーガはそのボールに間に合うことなく2バウンドして止まった
二人はしばらくほうけていたが、リョーガが笑いながらも悔しそうな表情をしたのを見てリョーマがこちらを振り向いた
俺がニコリと笑うとリョーマは実感がやっときたのかキラキラとした笑顔を見せた
「リョーガから点とった！」
「やったじゃんリョーマ」
「やりやがったなチビ共」

「チビじゃない！」
リョーマと喜んでるとリョーガがコートネットをこえてこちらに歩いてきた
リョーガが俺も込みで揶揄うが反応したのはリョーマだけであり、俺はその光景を笑ってみていた。原作でも滅多になかった越前兄弟の戯れだから見れて嬉しくてしょうがない
「こんどは一人でやる！」
「じゃあおれは見てるから頑張れ」
流石に疲れたから休みたい。ラケットを抱えてコートの外に出ると父が近づいてきた
あ、楽し過ぎて忘れてた。怒られるかな……
「テニス、楽しかったかい？」
「うん！たのしかった！」
テニスが楽しかった事は事実であるので笑顔で答えた。途端にへらっとした笑みを浮かべたのであ、これは怒ってないなとすぐに分かった
母もあらあらと優しい顔をしてこちらを見ていた
越前父もこちらに歩み寄ってくると頭をグリグリと撫でてきた。首が揺れて痛いから勘弁して下さい

「お前いいセンスしてんな！」
「女の子には優しくしなさい南次郎！」
「え!?女なのかこいつ！」
失礼な。確かに一人称は俺だし顔も服装も中性的だから間違えそうになるのもしょうがないけど。女の子としては傷つく台詞だからな。奥さん逃がすなよこんにゃろう
でも俺は何も言わずにただ静かに越前父を見上げる
越前父は俺を見るとリョーガと似た悪戯っ子のような笑みを浮かべるとその言葉を放つ
「お前さん、テニスやるか?」
その質問に考える時間など俺には必要なかった
「やります！」
俺は原作の事など頭からすっぽ抜かしてしまったまま答えた
だがその答えに俺は成長しても後悔などしないだろうと頭の片隅にふと思った

2話

越前父――南次郎さんにテニスを教えてもらう事になった

世界1位の選手に教えてもらえるとかどんだけ優良物件なんだ!!知り合いだったお父さんＧｏｏｄ　Ｊｏｂ！

しばらく打ち合ってた越前兄弟がこちらに気づいたのかラケットを持ってこちらに走り寄ってきた。二人にテニスが一緒に出来ることになった旨を伝えると分かりにくく喜んでくれた

人の表情から気持ちを読み取るのは得意だからな!!（仕事で人の顔色伺う事もあったし）

「お前本当にテニス初めてかよ」

「やったのははじめて」

「おれのほうがせんぱい？」

「うん」

俺がそう言うとリョーマ（越前だとややこしいから）はパァと耀かんばかりの笑顔を見せてきた

ううっ、可愛い……。肉体年齢では同い年だけど俺の中の何かが浄化されそう
俺が無反応だったからかリョーマがこちらを見上げてくるので、俺はリョーマに手を出した
リョーマはすぐに握手だと分かったのかギュッと握ってきた
ここで頭を撫でてしまうとリョーマの機嫌を損ねるので頭を撫でるのはもうちょっと仲良くなってからだな。俺も二人と仲良くなりたいし
「ソラ！」
「？」
リョーマが俺の腕を掴んでコートの方へ引っ張っている。私の方が身長が高いので動く程でもないが、遠慮なく引っ張ってくるので若干痛い。勿論顔には出さないけどね
「こんどはおれとやるの？」
「打ちながらのほうがおぼえられるってとおさんがいってたから！」
南次郎さーん。俺はそんなんじゃありませんよ～って教えてあげてくださいよ。俺まだまともな握り方も出来ないんですけど!?
それをオブラートに包んでリョーマに伝えると、今度はリョーガが「俺が握り方教えるから」と言ってリョーマの援護をした
……そこまで言われると断れないじゃないか！

俺はリョーマに引っ張られるままにコートへと走っていった
後ろの両親達がどんな顔をしていたのかを見ないままで

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

南次郎ｓｉｄｅ

「……なぁ、あいつホントにテニス初心者なのか?そうとは思えねぇんだが」
「いや、蒼空はほとんど家で本を読むか走ったり高いところに登ったりしてた位でテニスをやってる様子は無かったな」
「高いところって危ねぇなおい」
幸乃さん二人は赤ん坊がいるのもあって先に家に戻ったが、俺達は息子二人と蒼真の娘（男子にしか見えねぇ）がテニスラケットを持ってボールを打つのを少し離れた所から見る
蒼真は親バカ全開で娘を見てデレデレしてるように見てるが、その目は真剣そのものだ
蒼真の娘……確か蒼空っつったな。握り方は今リョーガ達が教えて握っているが、最初リョーガと打ち合った時に既に握り方が出来ていた
初心者らしく拙い部分もあるが、現地点リョーマと実力は近いんじゃないか?

リョーガのボールに追いつける脚力とラケットを振り抜く腕力、それにボールを視認する動体視力、しかも今はそうでもねぇが油断したら見失いそうな程の存在感の薄さ
どれも遊びで得た力と言えどテニスをやる上では強力だろうな。立派な武器になる
「あ、そう言えば蒼空が今度複合武術の道場に行くって言ってたな」
「はぁ!?何でだ!」
あいつ女だろ?しかもテニスやるっつってるのにその上習い事増やすって大丈夫なのかよ
ほぼ毎日こっちに来ることになるんだぞ
「僕が勧めたに決まってるだろ!蒼空は可愛いしもし不審者なんかに捕まったときに自衛できないとじゃないか!!」
「お前バカだろ!!」
心配性にしたって過保護だろ!この辺は治安比較的いい方だろうが。そのうち嫌われんぞ
俺がそう言うと蒼真は「僕の娘はそんな事言わないもーん」と若干拗ねた声でツンと顔を背けた。これで三十前半とか可愛くねぇだろ
でもすぐに蒼真は子供(ガキ)どもの方を向いた。その顔は真剣だが目が心配だと言っている

あんだけ才能あれば周りが放っておかねぇ。それこそ公式戦に出ればマスコミが黙ってねぇだろうな

子供ども(ガキ)を見るときゃらきゃらと子供特有の高い声で笑いながらラケットを一心不乱に振っている。あれ見てると俺もテニスやりたくなってくるぜ

その心の声が聞こえたのか蒼真がジトっとした目を向けてきた。お前のその読心術止めろっつってるのに聞きゃしねぇ。娘にも受け継がれてんじゃねぇだろうな……

「蒼空には信用ならない人にだけ使う事を条件に教えてるよ。だって今は僕達の事を気にしてるだけでこちらの会話を聴いてる感じじゃないもの」

「……将来は蒼真二号か？」

「まさか。南次郎だって彼らをそうしたいの？」

「それこそ冗談だ。あいつらには俺を超えてもらうからな」

お前なぁ……と呆れた顔を向けられたが、すぐに苦笑いへと変わった

俺だって父親だ。あいつらは俺の事なんて関係無く育ってほしいんだって事が分かるんだろうなこいつ

向こうではリョーマがバテたのか肩で呼吸をしてラケットを構えてる

リョーガはそれをネット越しで見ているが、蒼空は何を思ったのか靴を脱いで窓から俺ん家に入っていった

家の中には赤ん坊もいるし騒ぐことはねぇと思って見ていると、小さな水筒を持って出てきた。リョーマの方に走り寄りそれを渡すと飲むように言った。リョーマは最初拒否してたが蒼空のやつに説教じみた事を言われると渋々水筒を飲んでいた

リョーガが俺には？と寄ると蒼空は準備してたのか抱えた水筒の一つをリョーガに渡した。全員分ちゃんと持ってきたようだ

……しっかしあれ見てっと、

「誰が最年長か分かったもんじゃないね」

「心を読むな。ったく……」

あの三人は外見だけだとリョーガ、蒼空、リョーマの年齢順に見えるが、リョーガの気づかなかった所やリョーマの素直じゃねぇ所をフォローしてるのを見てると蒼空が最年長に見えてきやがる

しかも本人の表情筋が硬いのか滅多に笑わない。テニスを楽しいと言ったときもふわっとした笑い方で子供の満面の笑みとは違ったものだった。元々笑う奴じゃないのは蒼真から聞いてたが想像以上だ。寧ろあの二人が蒼空が楽しんでるのが分かってるってのがビックリだ

今はまたリョーガ達でやって蒼空がコートの外で応援してるが、少し口角が上がってる位だ

でも、蒼空は子供を見守る親のような慈しみのこもった目を二人に向けていた。四歳がするようなもんじゃねぇが、こいつらは気にもしねぇんだろうな

「さって俺も乱入してきますかねぇ」

「うっわ、南次郎鬼だな。習いたての蒼空もいる中に行くとか」

「何事も実践だっつーの！」

俺がラケットを持って立つのを見て蒼真が呟くが、俺はお構いなしに歩み寄ってく。蒼真もやれやれと溜め息をつくと俺の後ろをついてきた

俺達が近づいてくるのが分かったのか蒼空がこちらを向く

俺はその目を見てニヤリと笑った

「ほれ蒼空～やるぞー！」

蒼空は目を丸くしてパチパチと瞬きするとしばらくして頷き、ラケットを持ってリョーガ側のコートに走っていった

育てがいのある奴が増えるのは面白みも増えるからな！頑張れよ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

南次郎さんの所でテニスを習う傍ら複合武術の方にも参加をする毎日

正直言って幼女がやるペースじゃない。しかもテニスの方は時折泊まり込みになる事がある（集中し過ぎて両親が泊まり込みにしてしまうから）

それでも前世（まえ）では絶対経験出来なかった事だから楽しさの方が何倍も大きい。子供の身体だからか吸収力も凄い。子供の頃からの経験値の大切さが身に染みる

「ソラ！これ見よッ」

「ん～？いいよ」

今日も泊まり込みになり子供三人で寝る為のダブルベッドの上でストレッチをしてるとリョーマが絵本を手に持って寄ってきた

俺が本（小学校中学年位のもの）を読んでると、リョーマが後ろからのぞき込んできた事があった。その時その本の文字が読めなかったのが悔しかったのかこうして絵本を一緒に読もうと強請るようになった。

毎回の事なのでリョーガも参加するようになり、読み聞かせのようにして読んでいると途中からお話の内容の事に気がいって俺が二人を落ち着かせながら読む事が多い

まぁ大体リョーマは寝落ちをしてしまうが、俺とリョーガは本を片付けてから寝ている

リョーガは兄だけあってリョーマを揶揄う範囲をよく分かっていて、リョーマが寝落ちした時はその場で切り上げて最後まで読まないので、リョーマが機嫌を損ね過ぎる事

はない
「……ねたかな?」
「寝たな。俺が返してくる」
「おねがい」
　真ん中で寝るリョーマを見てリョーガが本を片付けるためにベッドから降りて部屋を出た
　隣で寝るリョーマの寝顔は普段の猫みたいな様子もなくすやすやと幼い顔で眠っている。頬をつつくと子供特有の吸い付くような肌の感触が面白い
「何してんだよ……」
「リョーマのほっぺつついてる。楽しいよ」
「俺はいつもやってっからいいわ」
　しばらく頬をつついてるとリョーガが呆れ顔でベッドに入ってきた
　俺の行動を咎めること無くリョーマと俺の頭をわしゃわしゃと撫でた
　特に抗うこと無く享受してると眠たくなってきた。うつらうつらとしてるとリョーガがフッと笑う声が聞こえた
「寝ちまえ。お前もまだ子供なんだから」
「……」

その時自分が何を言っていたのかよく分からないが、その時のリョーガの顔は寝ぼけ眼でもよく覚えている

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リョーガｓｉｄｅ

ソラが最近テニスの練習の後家に泊まるようになった。その時にベッドで持ってきてた本を読んでいた。リョーマが後ろからのぞき込むと読めなかったのか、ムスーと頬を膨らませたので頬をつつくと怒られたのを覚えてる

その後リョーマが絵本を持ってソラに一緒に読むように強請るようになった。俺も同じ所で寝るから一緒に見てるが、大体リョーマが寝落ちする

その時は俺が本を片付けていくのが普通になった

ベッドに戻るとソラは大概リョーマの頬を楽しそうにつついてる。自分も似たような頬のくせに人のをつつきたがるのだ

「何してんだよ……」

「リョーマのほっぺつついてる。楽しいよ」

「俺はいつもやってっからいいわ」

俺はソラの誘いを断って寝てるリョーマとソラの頭を撫でる

ソラは気持ちよさそうに目を細めて俺の手を受け入れる。でも段々眠たくなってきたのかうつらうつらしてきた

「寝ちまえ。お前もまだ子供なんだから」

俺の言葉にソラはふっと目を開けて俺の目を見る。眠たげでもその目には柔らかいものが混じっている

「……リョーガもまだこどもだよ……。たまにはあまえてもいいんじゃない……？」

ソラはふわりと笑みを浮かべ舌足らずに言葉を連ねた。

リョーマと同い年の子供のはずであるソラは時々自分よりも年上のように感じる事がある

俺はその時多分間抜けな顔をしてたと思う。ソラはふふっと笑うと音もなく静かに眠った

ソラの顔にかかっていた髪を後ろへ撫でるように退けながら人知れず笑みを浮かべる

……こいつには一生適わねぇだろうな。テニスの強さじゃなくて別のところで

俺は電気を消してベッドに入った。明日また二人の兄貴としてテニスや日常を送ることが出来るように

3話

「なぁ、もし俺が居なくなったらどう思うんだ……？」

これはもしかしたら彼なりの小さなコールだったのかもしれない

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

越前家にテニスを教わりに行くようになってあっという間に年月が経った気がする。といってもまだ1年経ったかどうかだけど

俺もやっと見られるテニスになってきた。まだリョーガみたいなプレイスタイルは確率してないけど、「まだ焦る時期じゃねーよ」と南次郎さんに頭をわしゃわしゃされながら言われたのでとりあえず基礎はしっかりさせようと思って鏡と睨めっこしながら素振りする毎日だ

今日もランニングがてら走って越前家に向かう。ちょいちょいご近所さんに挨拶されながら身体に合わない大きさのバックを背負い走り続ける。すると家が視認できる距離まできた時車が止まってるのが見えた

相手は無表情なのに対して南次郎さんはやや苦い表情をしていた。その状況に俺は足を止めてその様子を見るが1分もせずに相手は立ち去ってしまった

なんか見ちゃいけないものを見た気分になったので南次郎さんが見えなくなったのを確認して時計を見ながら数分たったのちに越前家に入った

「こんにちは」

「よお、蒼空。リョーガたちならあっちだぞ?」

「……うん」

あれを見たあとだから気づける程度だがあまり元気がなさそうに見える。でも俺は見てない振りをしているからその話題を出すわけにもいかないので大人しくリョーガたちの方に走っていく

「！　ソラ！」
「よっ、やっと来たな！」
「うん、またせた」
　身体は適当に暖まっていたからストレッチを開始する。１８０。開脚してペタンと身体が地面につくようになったのは日頃のストレッチのお陰だろう。前はこんな事出来なかったから出来るようになった時は思わず「気持ち悪い」とポロッと零したくらいだしな
　リョーマたちの前でやった時はびっくりされたけどリョーマに何故か対抗意識燃やされて１８０。開脚は出来なくてもペタンと地面につくようになった。え、原作でもこんな事できたのか？こわい
　充分に身体が解れたのを実感してラケットをバックから取り出す。クルクルと掌や手の甲に乗せたりしてラケットを手に馴染ませるのって無駄な行為っぽいけど何となくこれがルーティーンになりつつあるんだよなあ……
「お待たせ」
「こんどはおれがかつぞソラ！」
「うん、まけない」
　年齢故に自分より小さいリョーマにビシッと音がつきそうな勢いで指されたけど

可愛いなあ、としか思わない。勿論負けるつもりは全くないけど　今のところは俺の方が勝ち越し中である。ちなみに負け無しは南次郎さんだ。大人気ないと思わなくはないが、手を抜かれたら腹立つので全力で試合をしてもらえるのは嬉しい。次点でリョーガ、俺とリョーマとなる

「ふぃっち?」

「スムース」

「……よし!おれからだ!」

「リョーガ、審判おねがい」

「へいへい、次勝ったやつが俺と勝負な」

「!　わかった!!」

　リョーマにサーブ権を取られちゃった。と言っても俺は基本的にスムースを選ぶから完全に回転の結果任せになる。コロコロ変えたって結果がどうなるかなんて分からないし一々変えるのはめんどくさい

　リョーガが次試合してくれるというのを聞いてリョーマが目を輝かせた。滅多に試合してくれないからなリョーガは。喜ぶのも無理ない。それでも勝ちは譲らないからな

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……またまけた」
「そう簡単に勝ちを譲るかよ」
「くやしい。ブレイク出来ない」
「ソラはまだ球がかりーんだよなあ。その分はええけど」
　ゼェゼェと肩で息をして呼吸を必死に整える。その反面リョーガは肩で息をしてても俺程疲れた様子はない
　リョーマとの試合は俺が勝った。その後リョーガは少し休憩時間をくれたし全く疲れが無かったかと言えば嘘になるけどそれを理由に負けたと言うのは嫌だった
　リョーマがとたとたとスポドリを抱えながら走り寄ってくる。差し出されたスポドリを受け取りながらお礼を言って数回に飲み分けた。1回一気飲みしたとき思いっきり噎せたからな。反省を生かしてちみちみ飲んでる
「おいお前ら〜！とっとと風呂入れ〜！」
「！　ｒｏｃｋ！ｓｃｉｓｓｏｒｓ！ｐａｐｅｒ！」
「「１、２、３！」」
　後ろでリョーマとリョーガがじゃんけんしてるのを聞きながら着替えを持って風

呂場に向かう

テニスやった後汗だくになるし風呂に入ってから帰ったらどうだ？と南次郎さんに言われてお言葉に甘えてる状態だ。いつも俺が一番風呂なんだけど何故？と思うのは何時の話だったか

アメリカに湯船というものはないから基本的にはシャワーだけだけど、日本人としてはやっぱり湯船に浸かってゆっくりしたいと思うのは摂理じゃないか……??

「あがったよ」

「つぎおれ！」

「リョーマがかったんだ。おめでとう」

「おれはテニスでかちたかった！」

「またがんばろう？」

脱衣場で髪を乾かしてると入ってきたのはリョーマだった。俺の言葉にぷりぷりと怒りながら服をどんどん脱いでく。それでもひっくり返したまま洗濯機につっこまないのはいつも言ってたお陰かな

洗面台に置いてあるドライヤーを借りて髪の毛を乾かすが短いからかそこまで時間がかからずに乾ききった

「おっ、あがったか」

「お借りしました」
「相変わらずサラッサラだなおい」
「そう？」
　リビングに戻ると南次郎さんがかけてたソファーから顔だけこちらに向けてきた。南次郎さんに声をかけると近くにいたのかリョーガがタオルを肩にかけたまま俺の髪を触る
　髪をいじるリョーガをスルーして冷蔵庫から牛乳を取り出す。我が物顔でこういう風に人様の家電触れるってある意味慣れた結果なんだろうな。みんななんだかんだで警戒心は強い方だろうし
「リョーガ！次！」
「おー、今行く」
「リョーマ、それじゃあ風邪ひく。乾かしてきて」
「え～、……わかったよ」
　パタパタと濡れた髪のまま入ってきたリョーマと入れ替わりに出ていったリョーガを横目に乾かしてこいと言うと不貞腐れながらもリョーマはまた洗面所に戻っていった
　……今ここに居るのは南次郎さんと俺だけだ。表情の指摘くらいは出来るか？

「……南次郎さん」
「おう？どうした？」
「……」
　話しかけた時の様子は至っていつも通りに見える。自分の気の所為じゃないかと思うくらいには
　でもやっぱり着く直前のあの表情は気になる。あんな南次郎さんの表情初めて見たから
「……何かあった？」
「……」
　洗面所からのドライヤーの音とシャワーの音だけが響く。俺は黙ってこっちを見る南次郎さんから目を逸らさずただ黙っていた
　どのくらい経っただろうか。南次郎さんは徐に息をついた。そしてのそっと俺に近づいてきたのを静かに待つ
　俺の手が身体に触れるくらいまで近づいた南次郎さんは俺の目を見てふっと表情を緩めた。俺はその表情の意味が分からず首を傾げた
「……なんでそう思った？」
「……今日あったとき、元気がなさそうだった。ぐあいが悪いとかそういう感じじゃな

かったから、気になった」
　とりあえず見ていたことを隠したまま感じたことを言った。というか何ともまあ可愛げない言い方だな自分で言っててなんだけど
　俺の言い分を静かに聞いていた南次郎さんはぽんぽんと俺の頭を叩くように撫でた
「……蒼空にはまだ早い話だ。気にすんな。賢いお前には何となく分かってんだろうけどな」
「……そう」
　それだけで分かるか。原作知ってるから何となく分かっただけで選択肢多すぎるわ。
　まあ記憶通りなら十中八九リョーガの事だろう。ということはあの人はリョーガの引き取り手の代理人ってところか？
　俺は南次郎さんの言葉で追求するのをやめた。ずっと会えるわけじゃな　いのは理解してるけど寂しい気持ちは変わらない。ましてや別れが必ず来ることを知らないリョーマには酷な思いをさせるだろう
「かわかしてきたぞ！……どうしたの？」
「今日ダメだったところを聞いてた」

「あ！おれもやる」

今度はちゃんと乾いた髪をゆらしながらリョーマが入ってきた。俺たちを見て不思議そうな顔をしたけど咄嗟に出た俺の嘘にとびついてきた。南次郎さんはさっきの様子を引っ込めてリョーマを今まで通りにからかっていた

「おめーらはまだまだだよ！そんなんじゃ俺にはぜってー勝てねえな！」

「う、うるさいやい！」

「（全く……）」

俺はじゃれ合ってる2人を放っておいてテレビを見る。ただのニュース番組だから面白みは欠けるが外のことを知るのも悪くないと思う

しばらくすると騒がしさが増した気がして声の方を見ると、風呂をあがったのかリョーガもその絡みに参加していた。こうして見ると本当に仲の良い家族だと思う

「（……人生ままならない事もあるけど）」

家族と離れ離れになって寂しく悲しいと思うのは幾つになっても変わらないよね

「今日も泊まってけ！」と俺の両親に交渉して珍しく勝った南次郎さんが笑顔でそう言った。待て、俺の着替えはどうするんだと思ってると、服が一通り全部用意されていた。どうやらいつ勝てても良いように準備をしていたらしい。おいおい……

「……サイズは確かにピッタリだけど」

「それ男物じゃねーの？」

「だよなあ……」

南次郎さんに渡された服はどう見ても男児用のものだった。いや別にそれは構わないけども。元々は男だし

何だかんだで動きやすさはバッチリな服をもらうことになった。いつものリョーマ達との読み聞かせをしようと思ったら、リョーマが既に撃沈していた

「リョーマが寝てる」

「チビ助も疲れたんだろ。まだまだなあ」

「まあ仕方ないんじゃない？」

つんつんリョーマの頬をつつきながらニヤッと笑ったリョーガを横目で見ながらリョーマの頭をさらっと撫でる。本人の気質に合った猫っ毛な髪は指の間をすり抜けパサリと元の場所に戻る

「……ソラ」

「……？」

「なぁ、もし俺が居なくなったらどう思うんだ……？」

「……寂しい」

「！」

「リョーマとリョーガに出会って1年になると思うけど、いつも3人で一緒だったでしょ？だからリョーガが居なくなるとなんか……ぽっかりした感じがしてやだ。居なくならないでほしいよ、俺は」

「……そっか」

俺の言葉にホッとした表情をして答えたリョーガに何となくこの質問をした意図を察したと思う。リョーガの顔を真っ直ぐ見るとリョーガも俺と目を合わせてくれた。

「……リョーマに〝寂しくない〟とか〝どうとも思わない〟って言われた？」

「……」

目を逸らしたリョーガの反応に「やっぱり」と思いながら、それを言ったリョーマ

は素直じゃないと思って笑ってしまった。
「リョーマも寂しいよ。リョーガが居なくなったら」
「……でもチビ助は」
「リョーマは分からないんじゃない？リョーガが居なくなることが」
　リョーマはまだ5歳だ。別れを経験してないのだから、〝親しい人が居なくなる〟ことも想像が出来ないんだろう。リョーガもその考えに行き着いたのか若干渋い顔をしていた。
「……本当に居なくなるの？」
「……分かんねえ。俺が言っても変わるか分かんねえし」
「言ってみれば？ワガママ」
「それが出来たら苦労しないっての」
「……じゃあ今度写真撮ろう？リョーガのこと忘れないように」
　というかリョーマもあの事故が無ければ多分リョーガのこと忘れてなかったと思うんだけど。まああの言葉は地味にショックだったろうなあ、と思う。俺も言われたら多分凹む。リョーガもいた事を思い出せるようにという案を出したら「やだ」って言ったけど、耳赤いの丸わかりだからな。
「いいよ、こっちで勝手に撮るから」

「はあ!?」
「リョーマ起きるから静かに」
「おっまえ……!」
拳握ってプルプル震えてるけどリョーマのこと考えてじっとしてるんだからリョーガもお兄ちゃんだよな。揶揄うのは辞めてやらないけど。
「じゃあ俺寝るから。おやすみ」
「……おやすみ」
不貞腐れた声で返されたけどちゃんと返してはくれるんだから嫌いにならないんだよな。
……リョーガの運命が変わってくれるといいな。その時に何が起こるかは分かんないけどさ。ちょっと身体年齢に引き摺られてるのか泣きそうになったの堪えられて良かったわ。
未来は神のみぞ知る、ってね。